

線に征き帰還、次男の私は今申した兵役である。三男は海軍志願し各地航空隊に配属、九州より復員。四男は秋田工業学校卒、日満技工所で一年間教育を受け渡満、ソ連参戦を知り逃亡を続け在留邦人の中にもぐり込み、昭和二十一年八月、別人のような姿でようやく我が家に辿り着いたことである。

この様に四人の男児が無事帰還出来たことは奇跡であり、両親の喜びは察するに余りあるものであった。しかし、従軍中各地の戦場で戦没された方及びその御家族のお気持ちを思う時、ただ喜んではいられぬ、心より戦没者の御冥福を祈るものである。

敗戦の日々

山形県 舟山 敏雄

私は山形県西置賜郡飯豊村の農家の八人兄弟の次男として生まれました。学校を卒業して農業の手伝いをしばらくやり、昭和十七年一月から立川市曙町の陸軍

獣医資材廠の輸送課に入隊するまで勤めていました。昭和十七年の暮れ、現役入隊のため一旦帰郷、昭和十八年の一月に徴兵検査を受け甲種合格、山形県十六番衛生兵と告げられました。

検査でつくづく感じられました。禿もない体での精密検査で、尻の穴の奥まで検査、一物を握られ膿が出ないかしごかれての検査。精兵になる前提なのでしようが、一面破廉恥な兵が生ずる温床にもなります。

初年兵教育は満州でした。一月十六日に広島練兵場に集合させられ、一路満州国ハルビンまで連れていかれました。独立歩兵第一七四部隊に入隊し、星一つの新兵教育が始まりました。「お前たちは一銭五厘の葉書でいくらでも集まるのだ」という言葉と理不尽なビシタに泣いたことは今でも忘れられません。

戦闘訓練も終了し、一期の検閲が済んだら星二つの一等兵になり、市内の第一一四部隊に転属になりました。

その部隊は満州国の一等病院、皇族や関東軍司令官も入院する立派な病院で、陸軍看護婦と赤十字看護婦

が大勢いました。毎朝四列縦隊になって営門に入ってくる姿は勇壮なものでした。衛生一等兵の私は緊張のあまり、体がぶるぶる震えました。

私は毎日、朝八時から夕方五時までその病院の講堂で医学の勉強でした。外科・内科・伝染病科・精神病科・病理科・婦人科まで、産科を除いてまるで総合病院の医者 of 総てを教育され、終了後二期、三期の検閲がありました。検閲終了後、一選抜の上等兵に進級しました。

私は初年兵のときビンタされたので初年兵には大声で叱るがビンタはしません。それで兵もよく働いてくれました。病院の勤務は夜勤が多く、宿直勤務は時に精神病棟勤務がありました。

昭和十九年の十月頃、大阪陸軍航空補給廠京城支廠に転属になり、その支廠の威興出張所に勤務することになりました。出張所には兵員六〇人、女子軍属八人、現地傭いの朝鮮人が約六〇人働いており、私はそこで主任で白衣をつけておりました。四メートル平方の医務室には机や薬品戸棚もありちょっとしたもの

した。

兵や軍属はガソリンやアルコールの航空燃料の入ったドラム罐を山の中腹に五本宛に分けて誘爆を避ける作業に従事していました。重いドラム罐を手作業で運搬するので手を挟まれたり、足の指を潰されたり、医務室は患者でいつも込んでいました。たった一人の衛生兵なので重宝がられ大事にされました。

ある日、若い事務職員が「脇腹が痛い」と訴えてきたので問診並びに背後から触診の結果、乾性腹膜炎と診断し陸軍病院にカルテをつけて患者を送った結果、半月後、大阪航空廠から陸軍衛生兵に任ずとの至急電報が入りました。

南方の諸島は玉砕につぐ玉砕、そして沖縄もアメリカ軍が占領、最後にソ連の参戦でとどめを刺されました。それ以前に広島・長崎にはこの世の地獄が現出していました。

八月十五日、この日及びこの日の前後については多く語られていますので話す必要はないでしょう。

八月十五日以降、先ず日本人の女性事務員を三十八

度線以南の韓国に脱出させるべきだと隊長に進言し、村岡軍曹が引率して出発しましたがその後の消息はようとして知れません。また咸興地区の朝鮮人の対日感情も取り立てて悪いと言うほどではありませんでした。

問題はソ連軍並びにソ連兵です。ソ連軍が「勝手に部隊を解散したり、逃亡したものは銃殺に処す。素直に捕虜になれば二年間の重労働で帰す」の命令を発し、それに基づいて武装解除、菊の紋章をヤスリで削り消した小銃はソ連軍に渡しました。

私達の隊長（出張所長）は陸軍中尉で「私は逃亡しても戦犯でソ連に連行される。捕虜になるのを承知でここに残る。日本に帰国できる自信のある者の自由行動は認める」と言われた。今思えば随分大胆な言葉で、また一種の軍隊の解散宣言でした。内地ならいざ知らず北朝鮮から無事に日本まで帰れるか疑問です。十七人が名乗りました。私もその一人です。それから約九カ月の逃亡生活というか地下生活が始まったのです。

日の明るいうちに準備を整え、夜陰に乗じて逃亡し、一キロメートル程離れた知り合いの県視学官（現在の教育委員）の家に一晚泊してもらいました。ジャンパー、シャツ、傘等民間人の使用している衣類を分けてもらい、翌日から下宿探しです。

運良く営林署の尾内庶務課長の奥さんと道でお会いしました。奥さんは主人が防衛召集で狩りだされ、今、子供と二人で心細いから、是非家に来てほしいとの頼みでした。地獄に仏、渡りに船と言いか願ってもないことなので喜んでお世話になることにしました。

数日たった八月二十五日頃のこと、突然、玄関の戸がガタガタしました。「アツ主人の帰宅だ」と奥さんが飛び出すと、雲突くようなソ連の将校が「ダワイ」と右手を差し出しました。

驚いた奥さんは腰を抜かしそこにへたばってしまいました。私が「ダワイ」と握手をすると念入りに身体検査をし武器の無いことを確認すると、腕時計を指差し、こちらによこせと手真似をします。生命に代えられないので手首から外して渡すと、もう一個よこせ

と要求しながら上足のまま、ずかずか侵入して来ます。茶の間の欄間の天皇一家の写真を見つつけ腰のピストルに手をかけました。「ノーノー」と私は大声で叫び、急いで額縁から写真を取り出し火鉢で焼却したらピストルから手を離したのでほっとしましたが、生命の縮む思いでした。

ソ連の佐官級の軍人でさえ腕時計を略奪するのだからと限り無い不安に襲われました。不安が的中しました。二人、三人と組になって自動小銃を持った兵が、夜となく昼となく民家を襲い、「女を出せ、時計を出せ」と強要します。また歩行中の娘や人妻をジープで拉致し、一週間、十日後に放免します。その間、輪姦、凌辱と良識で考えられないことが行われたのです。日本人・朝鮮人の区別がなく手当たり次第です。女の人は頭を坊主にし、顔に鍋底の煤を塗り難を逃れるのに必死でした。

一カ月後G.P.U.が進駐し、大分秩序がよくなりましたが、目の届かない所、夜などは油断が出来ません。戦争は人間を動物にすると共に、負けてはならないと

しみじみ思いました。

G.P.U.の目を避けながら、朝鮮人の宅へ行き、薪割り、稲こぎに行き、五円の日当を稼ぎながら帰国の日待ち続けました。時たま擦れ違うソ連兵にじろじろ見詰められ思わず眼を伏せたこともしばしばでした。何しろソ連占領下の北朝鮮です。日陰の身の上です。脱走兵、逃亡兵と判明して捕まれば、ソ連の軍法会議です。二十四時間安心出来ません。居を移すことも考えましたが北朝鮮人の眼を考え、かえって疑いを招く基にもなると思いい取りやめました。ビクビクの毎日です。

その中、闇市場で米一升が六十円を越し暴動になり、日本人の外出禁止令が出て、一週間ぐらい家に閉じ込められました。その間、銃声の絶えることがなく、家宅捜査もあり、もう駄目だと半ば諦めの状況です。国会、政府、町役場どころか、警察、税務署、郵便局、銀行も閉ざされ、医者も商店も休業で全くの世界です。人が生まれようが死のうが、全く関係がありません。少し落ち着いてから、夕方五時から八時

までの外出禁止時間になりましたが、その間に外出した顔見知りの朝鮮人の米屋さんが翌朝銃殺体で発見され、大騒ぎになったこともあります。

やがて日本人共産党委員会が出来、その一階が事務所、二階が煙草工場になり、工員の募集に応募し細々と食いつ持を稼ぎました。

知人に清津から咸興に引き揚げた会社の従業員の証明書を発行してもらい、少し安堵しました。不審尋問の時などその証明書で何度か危機を突破しました。

煙草工場へ通い出し十日も過ぎた頃「金のある者から日本へ帰れる。一人千円だ。三百円は船賃、四百円は沿岸警備隊と保安廠の買収費、三百円は党の資金だ。募集を始めよう」の呼び掛けで天にも昇る気持ちでした。尾内さんの奥さんから家族三人分の資金を預かり申し込みを済ませました。

一週間待ち、港から百人乗りの船で南下しましたが、着いた所は三十八度線の北二〇キロメートルの北朝鮮の漁港です。船頭に騙されたのです。早速、保安廠に捕まってしまいました。事情を話し、一人三百円

の船賃を払い、全員、国境線の南に脱出し、寒村の漁港に着きました。そこで米軍の舟艇に乗り換え、釜山へ着きました。釜山へ着いた時、ようやく日本へ帰れる実感がわき不覚の涙が出ました。忘れもしない五月二十五日のことです。

翌日、米軍のリバティ号に乗り換え、その日の夕方、下関港につきました。

原爆都市、広島を通過、焼け野原の東京を越え、山形へ辿り着いたのは五月三十一日です。咸興で脱走したほかの十六人の兵のことは、今もって分かりません。